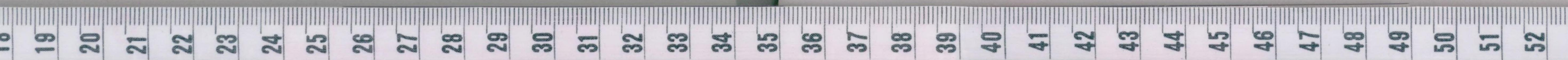
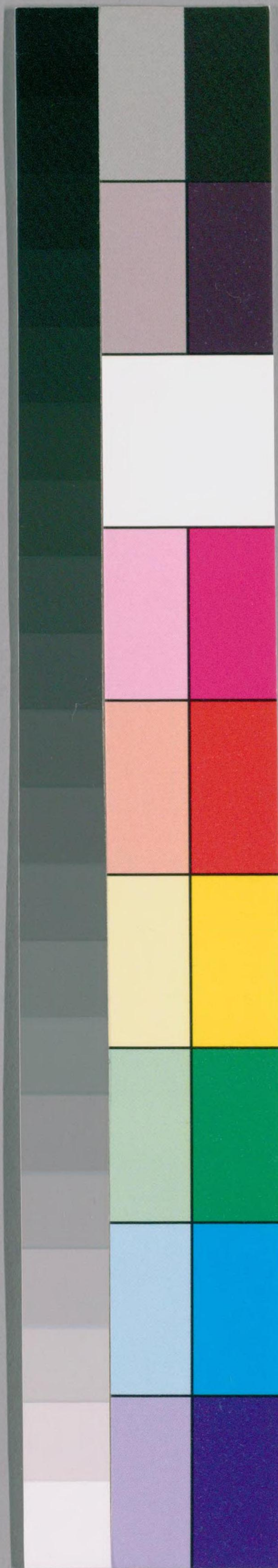


里見八犬傳

第九輯

卷貳

3
106
2



又世の邪魔と征まの縦寛家の家臣とも孝烈忠義の後生と鼓刀持の和郎
 又この意と會得と大阪が意見不就目今今も東西とあれは後方と
 馬を指招け雑兵があらはて遠く牽寄る馬を備駐めさせ又孝嗣が
 河鯉生此は是仁田山晋五が無る馬を備晋五と射て落と雑兵
 用の資あるて進退は自由とゆる今も仇の走り軍散と又用
 跨る逃る主趕着る敵捕れ躬方の馬を復せ微功とると論して後
 かと雑兵持る盛を合抗とれは是首級換る和郎が王の頭鎧を和郎
 忠孝の愛の獲るを東西と目今の遞とかり明日高嶽来て合
 做まかなあは主の恥辱を隠に功あり這里を死す勝るは
 頭へ牽向て尻と楯に馬の忽地放馬して橋を渡して前
 駐め道節も野們うち對して教諭始感謝堪ぞ仁義の敵突胸の劍も
 銘も向ふ

由る然らばの終立別れと答て馳て眉尖刀を雑兵持と角弓左
 うら跨れ隊兵們もあつて轎子の戸を閉籠て抬起と徐歩先
 嗣これをさして馬を拍れ兩番輪馳と遠く弓の前刺ひ固めて
 與君夫人の仇の怨且我君の會秘旨の恥異日の戦い雪えと欲
 一と名告わけと標と射る見的狂道節が背後に柱を椿樗の
 事不感まるも野道節憶を俱あつて通射る微妙の弓勢の樹
 象は是狗椿節は則是道節當意即妙歌人の風流は優る進止
 以孝嗣鞍局小揖を告別ゆくと馬無旋を片鞘二許先も親
 散の轎子も走着んと一鞭中も武者態を過目送る莊介小文
 聚令雑兵們も齊一嘖と嘆賞の鼓耳を合して憎く及通敵やと
 舊の氏も退れと自餘の武士們相勞いて這那の回答も最愛
 中も莊介小文





八犬傳九輯卷三

八犬傳九輯卷三



八犬傳九輯卷三

八犬傳九輯卷三



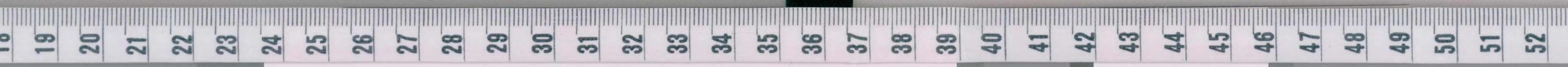
たまひを賞けるその功も亦莫大に這功なりと那行心か換ふ許をけらるるに。その美引ひね。
 と異口同話勸釋か道節僅か點頭て酒家任權と上目とてみづら。驕昂ぶあつて軍令
 忽ちその士卒是より急るべ。敵備敗北の恥を雪めんを。猛り多勢を驅催して引返して敷る
 正あつて。躬方の英氣ゆき振るで。東に槍あつて。今軍令を正しく。専ら其の與を
 とも衆兄弟の請う所。その理あれ。黙止せらる。異日の衆議。依る。其の。心で。有種。あつて。對ひて
 和殿の罪過。輕き。あつて。權且。諸大の意見。就く。我今。その。罪。糾。速。船。小。速。り。て。衆。人。を。皆
 ねり。酒家の諸大。共。侶。は。五十子。赴。て。大塚。にて。凱陣。せん。の。義。行。ひ。た。り。て。有。種
 怡悦。勝。言。美。考。退。け。り。當。下。毛。野。の。邊。道。節。們。と。談。き。を。大。塚。生。の。奇。計。か。り。子
 子。既。小。落。城。と。那。里。小。敵。の。あ。つ。て。の。河。鯉。の。義。を。あ。り。我。身。を。り。の。各。位。と。俱。那。里。小。到
 らんと。忍。び。た。処。あ。り。今。と。り。与。之。と。主。と。俱。船。在。り。て。凱。陣。と。せん。され。各。位。も。亦。速。か。退。れ。り。
 海。は。浮。む。と。紗。と。吹。願。ふ。扇。谷。の。官。領。正。は。必。足。忍。圖。の。城。を。投。て。走。り。て。這。里。より

是。那。里。へ。の。路。の。程。二。里。過。た。る。を。多。く。那。里。の。城。兵。を。り。て。東。か。推。寄。ま。る。と。あ。つ。て。初。の。戦。ひ。と。同。か
 ら。疲。勞。する。我。小。勢。と。新。隊。の。大。敵。不。當。り。と。危。し。も。最。危。急。な。べ。然。る。も。西。北。の。大。塚。の。城
 あり。北。赤。塚。石。濱。の。援。あり。又。鴛。鴦。島。柳。河。肥。の。諸。城。あり。通。り。五。十。子。の。兵。火。を。親。近。に。三。三。時
 刻。の。程。遠。な。も。必。通。宵。走。り。援。の。軍。兵。と。ま。る。と。急。ぎ。思。ひ。か。と。意。屬。れ。道。節。听。け。屋。領。に。て
 寔。不。微。妙。も。あ。れ。り。と。大。塚。を。告。知。と。共。侶。快。凱。陣。見。和。殿。の。素。も。那。里。我。守。り。船。を。皆
 ん。と。の。る。と。亦。人。の。及。及。所。宜。く。の。意。不。儘。の。と。心。て。多。智。の。服。け。の。余。が。莊。介。小。文。吾。現。八。大
 角。も。共。小。毛。野。を。稱。と。親。疎。恩。仇。殊。も。一。旦。人。と。約。束。ま。る。の。信。と。失。つ。と。且。敵。と。知。り。已。知。兵
 法。も。亦。軍。師。の。才。あり。然。が。仁。義。八。行。の。玉。の。内。中。を。智。守。と。る。以。あ。る。と。只。顧。感。と。已
 ざる。徳。而。落。點。有。種。の。五。大。士。辭。別。れ。毛。野。と。俱。る。身。の。隊。兵。五。七。名。と。い。が。立。高
 駿。の。濱。退。く。程。小。肚。裏。の。事。約。莫。け。の。戦。ひ。大。山。が。武。威。と。赫。を。り。我。帮。助。の。備。を
 づ。る。と。我。備。を。多。く。舊。好。の。軍。兵。を。驅。催。し。船。を。柴。浦。へ。寄。せ。ま。る。と。那。人。義。秀。親。徳。の。勇



ありとありと。三百有餘の敵兵と獨戰して勝りあへん。信れが功を我に譲りて上席の
 こそ居るはなれと思ひたり。然るに我軍今違ひて外を此も借さる。是英雄の真面
 目。賞罰親疎を名將の遺風ありと。我那人叱られて一旦腹の立つる。今
 思へば。我軍兵を驅催して大山氏を資け。是君豊嶋殿の死を雪ん。與る
 まじの神速と恩あり。何等の功誇ん。我行の諺ちね。自管慚愧後悔して七犬士と敬
 べき。支の始に弥増け。況件の光景も。せし隊兵の道。即ち賞罰の正。かりし古と掉
 ち。實は稀有の豪傑。多う。我先亡の怨を雪る。も。嘆賞と怠
 るの。の。公程。道。先隊兵。纏。晋。戰。飯。披。躬。方。の。戰。殺。を。速。く。快。五。十
 子。會。下。と。莊。介。小。文。吾。現。大。角。這。四。犬。士。共。侶。草。の。結。縷。草。坐。占。て。果。飯。を。快。五。十
 大家。飢。饑。不。題。更。話。表。大。塚。信。乃。成。孝。の。御。前。大。山。道。節。共。侶。五。六。十。個。の。隊。參
 從。て。伏。て。谷。山。の。樹。蔭。に。在。る。既。り。て。道。即。ち。仁。田。山。晋。五。主。僕。と。射。て。人。馬。共。生。拘。り。折。五。十

子の城の動靜とて。來りて遣り。間謀の雜兵が。まの。か。て。報。る。縁。連。が。敷。れ。多。の。伴
 當。們。幾。名。歿。五。十。子。の。城。逃。て。來。り。支。佐。々。と。許。え。城。内。騷。動。大。々。々。管。領。を。定。正
 勢。を。大。阪。生。們。を。擄。捕。せ。し。出。馬。の。准。備。と。い。は。れ。信。れ。今。も。程。も。管。領。這。頭。遍
 ら。下。御。小。心。あ。れ。か。と。道。即。ち。即。ち。の。多。く。憶。も。額。不。加。え。料。る。不。倍。幸。ひ。多。る。定。正。み。が。ら
 出。て。來。り。校。を。敷。捕。る。鈴。の。茂。林。の。頭。に。在。る。大。飼。犬。村。一。隊。の。士。卒。大。阪。の。與。り。も。と。動
 ち。及。び。と。潛。り。居。る。と。言。え。先。大。飼。犬。村。謀。合。を。定。正。と。前。後。も。攻。撃。を。せ。し。情
 地。の。一。個。の。雜。兵。を。鈴。の。茂。林。遣。て。件。の。支。の。趣。を。現。大。角。告。げ。り。登。時。信。乃。と。肚。裏。か。一
 計。を。思。ひ。起。せ。り。道。節。の。情。語。を。定。正。み。が。ら。緝。捕。の。與。り。勢。を。お。と。せ。り。來。り。も。五
 十。子。の。城。内。に。在。る。三。三。千。の。士。卒。あ。る。一。然。和。殿。の。計。を。定。正。前。後。不。敵。と。受。て。敗。北。及
 ち。折。り。の。支。を。城。内。へ。運。び。加。勢。の。兵。を。出。さ。る。と。あ。る。が。折。躬。方。の。勢。を。神。敏。忽。地
 方。位。を。易。て。勝。利。及。て。大。敗。と。あ。り。酒。家。一。箇。の。壽。策。あ。る。箇。様。々。不。仍。五。十。子。の。城。を。合。ん



正樹と拔は枝を拂ふる易ふ條へと解しせ道に即斜るを必欲して是れは妙計を成る時
 我の亦後安く仇を殺さん快々準備とあひひのぞく隊兵を二十許名引分て惜々地小信乃
 従ひて五十子の遺一ける公程中大塚信乃の道節が射て虜ある仁田山晋五の伴當も
 身邊へ牽坐させ詞徐に鞫るや汝素より晋五が伴當大塚より来るに於て亦五十子の城兵
 る我名何と喚ゆる汝も命惜かべ我計畧に従てその我と音く做とあふ命を饒に
 るに重賞を命じ候へ。悪き招き甚厭を問れて伴當の權氣ある面色也相跪
 額をて刀柄の上在る何ぞ搗鬼と哀れ死御南小可仁田山刀柄と共侶の遊入重と
 那人の伴當ある越杉駱三主の鞋奴也外道と喚る者原白金の土民なり軍役の與
 驅入られて年來五十子の城内不在今番館より龍山主の個の使と相摸の北條家へ
 遣はる中より小可也起初の人足も充て越杉王も隸られる命を饒あつら何責せ仕らん
 仰付らるるやとあそく陳を信乃は領て然るに素と解ねる雜兵外道が郷縛を

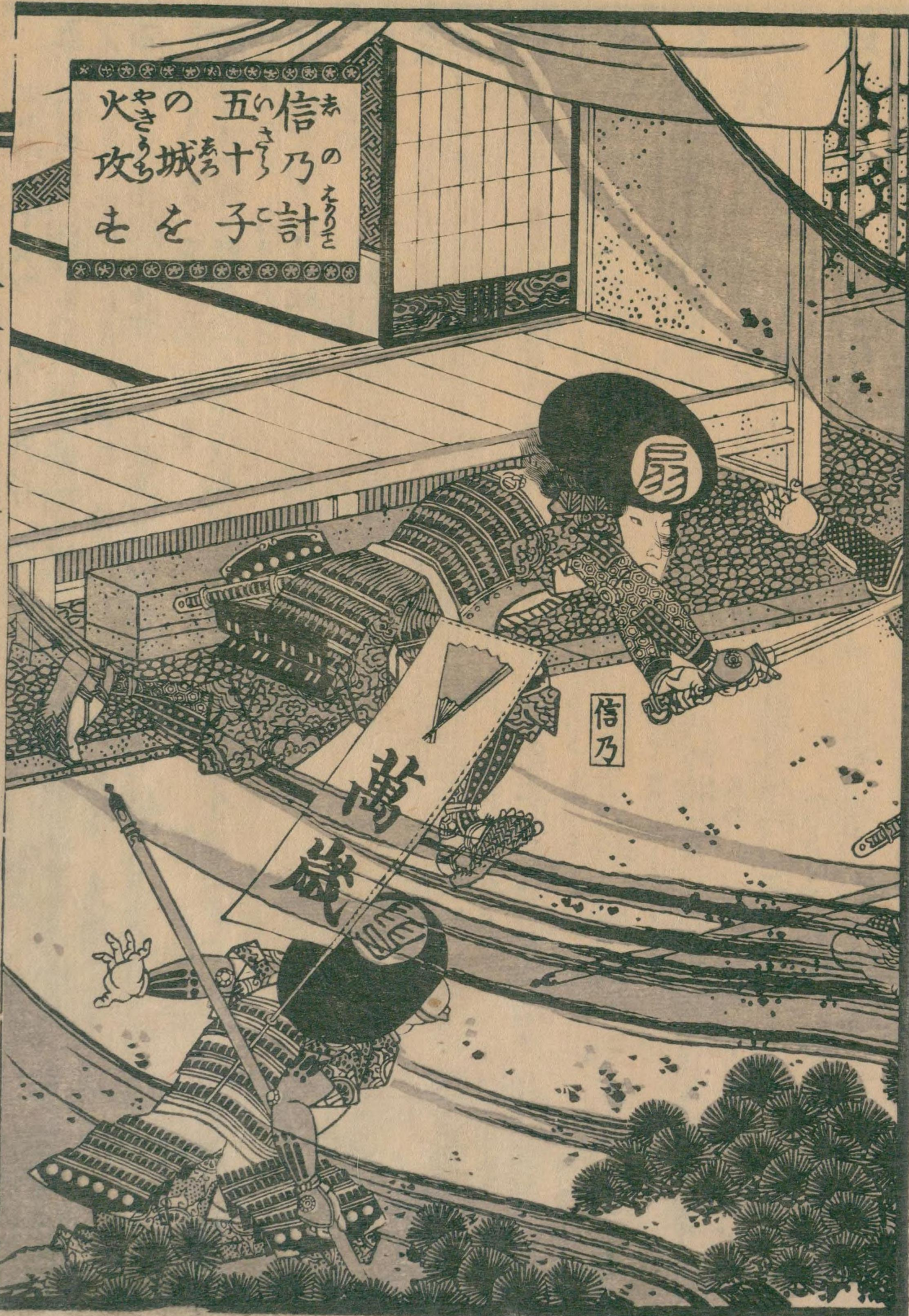
釋鏡とて俱て高曠のへ赴て外道二の幸ふ脚の矢傷の斜痕を引裂れて瘡を
 包む杖の推すを依信乃の從ひける信而信乃の二十個の隊兵を俱て間路より情を地高曠
 赴程の程と樹蔭を潜伏と權且時分を等程の既も定正の士卒二百餘名をて走之鈴の
 茂林のへ赴てと分明をける戦ひも敗れけし士卒忽地乱嘩れて五十子のを走らぬ
 垂れる標幟鎗眉尖が草鏝を信乃の信乃の也先と是れ究竟と雜兵を中へ送り拾
 合してその武具を着せ標幟を挿せとて元奈系へ城兵の逃からる似ふ扮準備の火
 芥を竊り持し然而外道二の信と計策と具示し一町許先を立て大家より五十子の
 城を投て走らぬ公程外道二の信乃は壽策の從て五十子の城小走のから是れ先定正の從
 た士卒幾名逃走するからと大山道節が勇戦の言の趣射方既戦肩て數々の言を
 注進分明をける城兵の士卒駭謀前後の城門を鎖固を切人の出入許さ加勢の軍兵を
 是て議を程外道二忽地から城を敲て喚る小可是當城の雜兵外道二鈴の長杖戦



難義の及びて上（定正）の危を恐れ、武具を脱棄して棄武者不殺の誓を以て、自今城歸城を至
 る。快々城門をうち開けて入れしむる。と叫ぶ。正門を成る頭人某甲よと、城櫓に登りて
 之と看且ま。城内の雑兵の件の外道二と、奴隷と認るものありといへ。現疑ふべし。あ
 り。後小跟着來ぬ。士卒二千名許あり。標幟武具の色をも、躬方紛れなき。原
 來館（定正）那内中の潜ひて御座まらん。と各々も猜し。此も疑議せし邊、走下りて
 却雜兵們の不知し。躬て門白を用せり。登時信乃の千個の隊兵を従へ。先小立
 入り。那頭人入る不曉得ら。雜兵を後方へ退け、跪居て迎へんとし。信乃の刀を抜く
 ても、存存只一敷を砍付せし。駭慌る雜兵を又西名欲伏せし。名告知る。聲尊も大に煉
 馬の殘黨大山道即忠與が、義我兄弟大塚信乃成孝の存在。我も亦大父匠作三成の
 主君なり。故鎌倉の管領持氏朝臣の兩公子。春王安王の奉為。吉嘉吉の死。復元
 志。命惜ら。城兵們降参せし。罵懲して向ふ。前を大刀風城の雜兵辟易し。勿

地成りて喪ひけり。然バ計畧その圖不當。犬塚の隊兵們も、那這火を放ちて、當り小
 儘して殺伏々々。縦横を礙り、戦ふ程。扇合の君臣千百人の凶煞。這日小丁。西南の勅
 風猛小起り。その火城中小元満ければ、城の士卒は、慌て、駈馬小ち乗て走らざる。と
 怒るものあり。弦を引、小前へ合添て、彎弓とら。呆るものあり。周章與て、小中、小偶
 志氣ある老兵も、噪ぐ。躬方罵將と、敵の小數人、小過、推捕、網て、敷き。と、咽ら
 鎗を引提て、防戦んと欲す。小城兵を、咸風下小存。猛火も亦攻られ。面と向死りの存
 ず。男あるもの、怯れるもの、共、侶の身と、焦を、最期、哀れ、夏虫の、火虫も似て、累々、中
 辛く命を免れ、皆、後門より、落亡て、不覚の羞と、又逃、後れ、死後れ、せん。多
 俱の盛、脱、鋒を、倒、敵の、目前、平伏し、命乞ふ。又、河鯉、佐太郎、孝嗣、城を、退去、顛末、
 守如の、火中、慌を、敵も、怕れ、主、徒、自殺の、為、体、且、河鯉、佐太郎、孝嗣、城を、退去、顛末、
 前回の、具へ、看、官、前後と、照して、る。間、話、除、敏、系、却、説、信、乃、降、参、の、城、兵、を、數、る、都、て





八犬傳九輯卷三

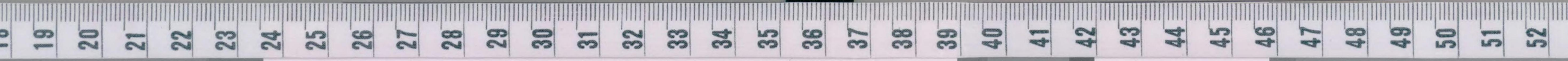
十

○改竄景藏



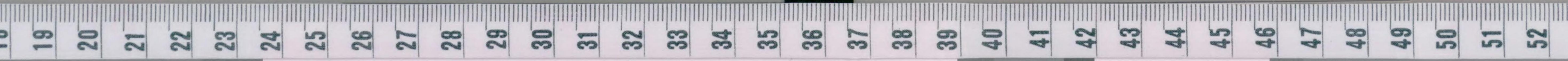
八犬傳九輯卷三

○改竄景藏



五十餘名也。即便其兵每吩咐て水と汲せ火と滅さるる案内も立拵は
便利又隊兵をも部して前後の城門を成るる火の鎮るる程の坊賈莊客
們の五十子の城と敵の爲に攻落されと知るものも失火すると思ひて大家も
柄長圍扇を携て那遠より走聚ひかゝる兵火のよも知らず且駭馬且怕れて逃
けんと信乃いも城兵を外へ喚禁めよと示し招入れ城兵を相次見て餘燭と鎮むと
命せらば件の坊賈莊客們的戰栗庫を忍んで幾十苞の戰栗と煙と散滅留めけり既中
那這の猛火をさるる鑊ければ信乃の故老の莊客と里正們を喚迫着年來扇谷定正政事
好す向ふ大家実を吐ると必だ近属龍山縁連が頭して權柄を執りより貢調を重
くして民の艱苦を憐まそ然も年々の軍役の耕作の時失て酷吏の慘然堪ざるも
故或ハ子と售り妻と鬻鬻にて困主の欲不充るといけり信乃いれをちめて愀然とて嗟嘆不
堪を降参の城兵們をばんとす若們も亦これを知り苛政の虎より猛る定正果世の

名族とて國と治る所以を知り同宗頭定と確執して且良臣持資を用ひて克ん家賢
妻忠臣あれも行路人の思ひを倣く倣人縁連の毎と重任に民の塗炭を救ぎてこれを聚
斂の臣儘して謹債ると以忠を信故良某の身と艱ふ效あれも苦をりて當以諫
言の過を改る益あれも違をて敢听を心と師と一むぐ取貝とて會れを飽言故失ふ
所のく多かり前多頭定を逐れて鎌倉の雙枝を正と爲後景春が叛れて毛越數个
城を奪れり宜大山忠與一將百卒の小敵小遇す一箭前を射出さ一人を斃るる
きて二三百の士卒と亡ひ今我二十個の隊兵に當城を陥されて士卒の死亡半小過たなり定
正の敗績の自業自得といひる百姓何の罪あらん我當城を陥れも城の據り地を畧す
武威と近圍張んと欲せば今日當城を退くもの若們四門をよく成りて
その主のかりを折の義を報て城を獻せよ奴が台をべらんと嚴ふ告示し又里正們
うち對ひ我若們の庫中も金錢戰粟を取去り速りて退き宜く配分致せかとの



よろこびのこころをいひて、
 是で然る衆人の送らぬと注し、速に答難しと信乃の意を猜し、微矢を
 ら諭さず、若し今赦す我賜と受るといふも、舊の城主のかり來て外不遇んと恐れ、首
 鼠兩端の思ひと做さず、這米錢の若し若しと妻と鬻ぎ、鬻ぎて苛刻の重斂を調へ、
 我當城を攻陥し、一霎時も當城に在ると死の金錢米穀いへり、若し若し亦我民
 我一日の父母とて、今我獲る東西をりて、毫も犯さず、
 散し七民を賑せ、誰の不吉なるのあらん、且這庫中多米錢、兵火を焼るべし、若し若
 聚來り、消防勉むるをりて、遂に恙なきをゆるし、その功も亦賞ま、道理の佳地なき
 尚占まばせん、せんあり、とくといひ、腰多黒才と拔出、戰粟庫の白壁寫着
 依數行の文を大家ひとく仰瞻るふ。
 故鎌倉管領足利持氏朝臣兩公子、春王安王、小傳、大塚匠、作
 三戌之嫡子、大塚番、作一戌之獨男、大塚信乃、戌考、以精兵才

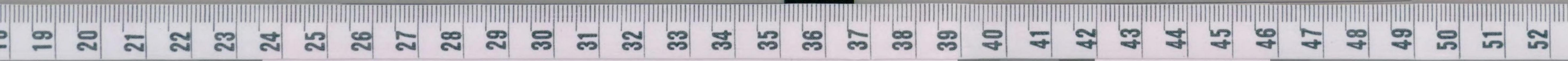
二十名、來攻本城、須臾拔之、以與父祖、雪先君舊怨者也、是併
 同盟義士、犬山道節、亦欲復君父之讐、是舉在資助其大義矣、
 吾既已拔城、毫無所犯、蓋以民者國基也、雖有金城石墉、然無
 民其與誰共守焉、即開倉廩而賑窮民、錄數行以留姓名、一日
 主人公亦是民之父母也、累世國司、蓋憐汝之民、儻有外口民之
 受于吾者、吾復來而屠城、勿悔。
 文明十五年癸卯春正月二十一日
 諭示
 とを寫し、里正坊賈、社客們、其仁言を、所這諭書を、看て、孰も雀躍せ、
 類つ死恩と謝きて、俱に戰粟庫より、用ふ一座十五間、多りの五庫あり、
 各米粟三千石、あり、都て一萬五千石、又空藏の金錢あり、雜貨庫の酒あり、餅あり、乾魚あり、
 枚、擧る、違わぬ、當下信乃、又下知し、酒の樽蓋を、打除せ、餅の殘燼、
 小多し、衆人并、



その身の隊兵降参の城兵も酒を餅を好まざりて飲まず。其の身僅に
 纏腰戰飯と披給て飢餓を繕ひけり。介程衆人の部と走りたる近御隣村に告知し馬を
 牽せ車を推さるる件の米錢運送も或の燬免れる城の乗馬を借用米を駝し
 牽出まも然も山做米と錢を繞る半响なる程を送る運ぶ盡けり。登時信乃里正と
 故老を誡めて約莫我賑給へ。這里聚會ひれり。總て這城小隸られる村落も
 莊園も坊賣とねく農戸とる。田圃戸の寡寡合令て漏まき配分せよ。若們倘一毫の私
 仍ひあつて異日我決て饒さ下。ある言示が大家地上拜伏と仰らけり。山陰仁
 慈の賜を誰が私仕ん。明日も君が生祠を村毎に建戸々祭りて御恩を子孫傳へん
 噫と喜びて。身之暇とあるべし。別を告て皆共侶うち連立り退りけり。

第九十五回 頭鎧を鼻く忠與凱旋
 鼓盆の悼と定正過を知る

浩處道節の莊介小文吾現八大角們と共侶隊兵六七十名と従へり。五十子の城小來
 けれ信乃の隨便隊兵城門を閉か迎入れて却城攻の支の顛末計策その圖當て二戰
 全勝とる。及倉廩を用て窮民を賑一方支の趣并降参の城兵を饒し。其の復
 々もその崖略と報。道節の莊介の四大士とる。各も所あり。約莫舊君の復
 讎言の酒家本人とへもその軍功と論まれば大塚及ぶ。今も一級と降ら由係
 稱賛ある。且々道節の信乃うち對ひて。定正敗北の為体及河鯉佐太郎孝
 嗣が忠孝鮮目目前と權佑守如が自殺の事。又毛野の河鯉守如が知己の義を思ふの故に
 辞して當城へ來り。他が遠慮の議論も箇様々と鮮示し。我定正と趕ひ一折
 才小盛と射落して裏缺が。一送恨られ。和殿の巢穴と攻破して民の困を賑せ
 去の實小ゆ。愉快の。然るごとく堀と毀ち斬と埋めて火を滅さる。降参們を

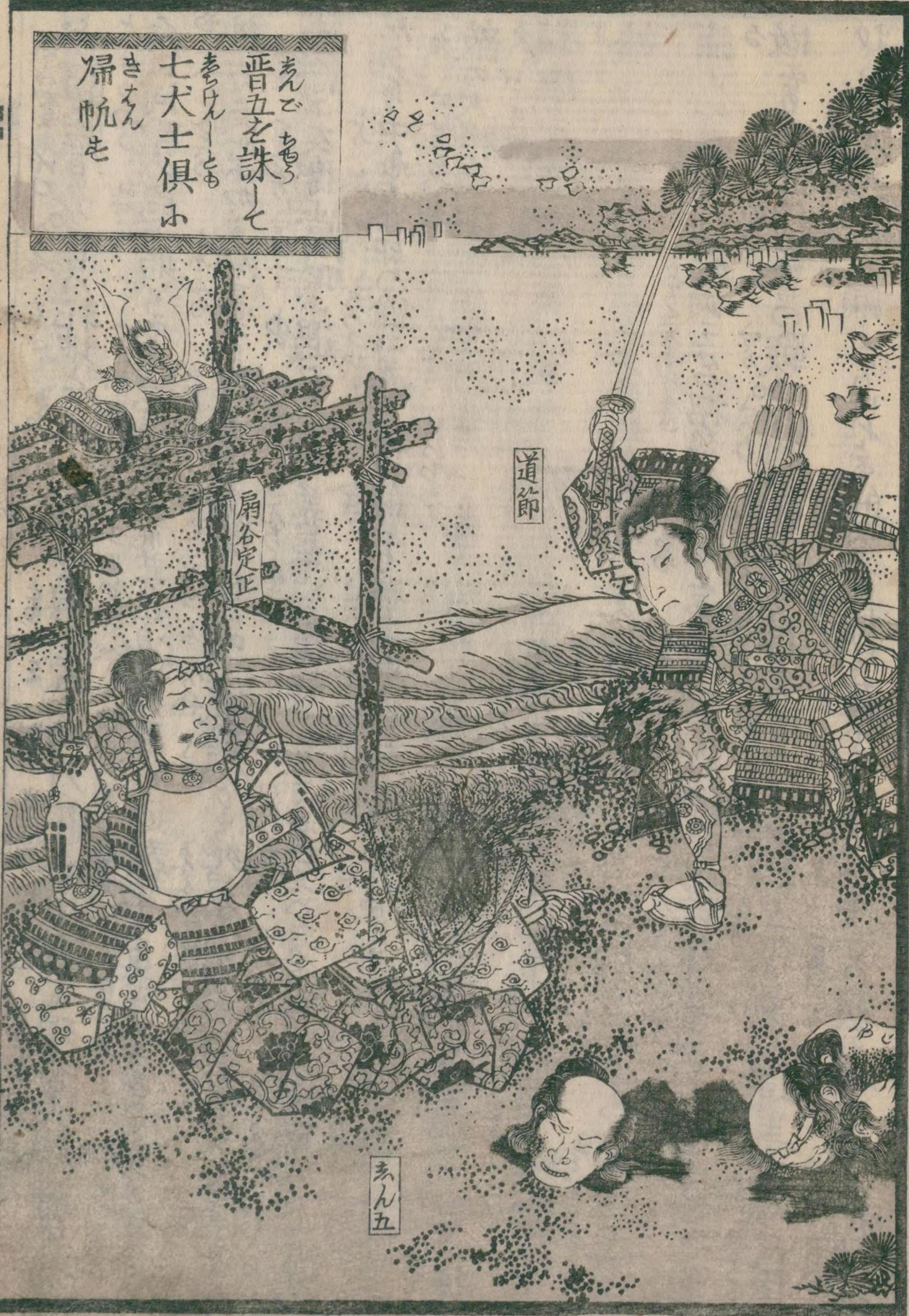


敵と武を赫しあはるるを緩かりた怨を信乃の諫てふ事古昔の仁人志士の残不
勝殺を祛けて化育と天地と等しくせまきも然るにけの戦ひも人殺せし一個の仇成
敷もんと兵も宜しく思ふ事今も仇を敷も漏せしを怒を移して城を毀ち降れる
兵を敵にのみ是暴とゆふその考その義何処あるや悍たを武とせしは是本と勇と
の争ひに近世楠正行主足利義詮卿を敷も走して舊都の中を折佐木道實
第を燔る唐山泰の蒙恬の趙の降卒四十萬を宛めて竟ふ詭死の祟あり當城千鳥
士卒の如しの忠も勇も俱に命を惜むが與に命を喪ふのヨマりの中か鮮目
前あり又守如親子あり那主従の死を今初て啼く尾研の中か碎ける玉とあらん悼む
べ。信れが那賢室と忠臣の與も屏を毀し金斬を埋めを這降卒們の成らして人の命もあ
儘してを義とあはるる勇もあはるると思ふ僻言るを死後とあはるる備とえられ大角口管嘯
唱と犬塚主の宏論千金をいられ昔保元の猛將為朝主武勇強り儔稀とされ

どの口當面の敵と射て相逆へる敵と射せ常の神佛と尊信して皇威を懼るひか世
良將と稱らるる為朝尚の約ひく一暴雄は過ぎるの然る世の常言の窮鳥懐か入は
とら獨夫もこれを捉らるる何ぞ降参の城兵を誅せ死後を毀り斬り埋るるも我々は
ここに立去る明日より又修復せしめて管領必から住ん然るに勞と功をえりといへ又莊介
小文吾現も道節と俱に諫めて犬塚大村兩兄弟の既なる理と盡されしに従ふと勿論る
る。御京大阪が遠慮あり近江の諸城より加勢あるをたしとられて凱陣を急らるる今
速に退く。全勝とせ死の長詮議の益無似りの快々凱陣を急らるる異口同音く實釋
ある道節も思ひ返してうら微笑の點頭て有理るる衆議に従ふ。御京の仇を敷も漏
せし焦燥し心も休らざるを要する言と費し。士争友ありたその身命を失つて
聖教の今我うへても亦ゆるる幸ひるる。壁を大阪毛野の如く未生の時より兩個の冤家
あり并ぶる面を認めらるるも單身でその仇を敷も果らる。又我仇の大諸侯を尤近づ



八犬傳九輯卷二



晋五を誅して
七犬士俱ふ
扇谷定正
道節
玄五

十七

八犬傳九輯卷二

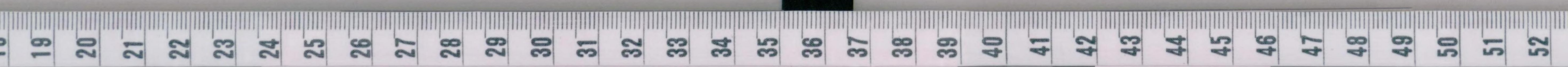


八犬傳九輯卷二

八犬傳九輯卷二

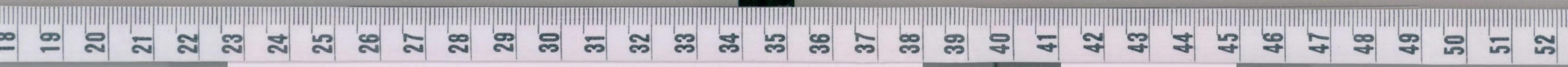
仁田山晋五が首の托地と落おけり。を傳へ看る信乃莊介小文吾も現八も六松歴おけり。
 戸田河原の危窮と云ふ思ひ出で。芒草山真道の夢の迹。借平が音立目。鬼の置れ即の
 往方。心おか。潮曇り。濱邊お立。松吹く。風の便り。絶果て。雲宵。懐ひ。へ。品品。踰
 去。傳。友。傳。當。時。小。遇。大。角。も。善。惡。心。報。任。そ。と。人。を。思。へ。身。形。を。く。慰。難。て。愀。然
 たる。中。道。に。即。徐。お。又。と。拭。ひ。ぬ。め。御。原。那。隊。兵。が。樹。を。伐。り。て。造。り。立。る。泉。道。道。道。道。
 敵。の。大。將。扇。合。定。正。の。盛。と。第一。采。果。泉。さ。り。次。の。仁。田。山。晋。五。首。級。并。敵。を。捕。り。仇。の。從
 類。地。上。織。平。末。廣。仁。本。太。二。階。堂。高。四。郎。三。浦。三。佐。吉。郎。們。の。侍。品。の。頭。願。二。十
 餘。級。定。正。と。首。と。と。その。姓。名。の。知。れ。る。牌。小。寫。推。立。て。征。伐。の。終。り。か。即。便。這。頭
 浦。人。の。長。め。え。る。と。西。三。名。招。れ。て。示。ま。さ。う。我。の。先。亡。煉。馬。殿。の。殘。黨。之。大。山。道。郎。と。喚
 做。ま。り。の。え。は。復。雙。言。の。戦。ひ。大。利。を。得。て。數。を。捕。り。首。二。十。餘。級。方。僅。泉。て。這。里。に。在。る。口。恨
 む。く。定。正。と。數。を。漏。ら。せ。れ。ば。射。て。その。盛。と。獲。り。し。ら。し。權。且。首。級。代。り。を。若。們。浦。人

送代り。うち守り。と。偷。見。ゆ。太。尊。れ。明。日。夙。め。人。あり。て。來。て。這。盛。と。合。め。と。あ。ら。う。と。告。て。遠
 与。ね。か。し。の。折。ま。を。悔。る。と。町。寧。小。分。付。れ。浦。人。們。の。駭。怕。れ。て。沙。小。額。を。穿。埋。め。異。議。形
 く。言。来。ま。り。然。る。に。凱。陣。を。し。れ。澳。の。と。看。且。ま。船。の。這。頭。お。あ。ら。し。此。水。浦。の
 澳。小。又。え。け。り。あ。れ。の。道。即。の。餘。の。五。大。士。と。共。侶。隊。兵。們。を。そ。ぐ。立。て。浦。曲。ひ。お。走。る。と。七
 八。町。及。ぶ。程。澳。よ。り。も。各。く。足。を。馳。て。船。を。漕。寄。せ。け。り。登。時。陸。隊。兵。們。の。始。め。と。相。別。れ。て。二
 三。艘。の。船。ま。ら。ち。乘。り。道。即。并。小。餘。の。五。大。士。毛。野。有。種。們。と。同。船。を。送。の。終。り。へ。く。も。あ。ら。
 道。即。の。先。有。種。小。躬。方。の。戦。殺。金。瘡。兒。の。言。察。と。誰。何。と。尋。問。小。有。種。答。て。然。る。に。御。向。小
 命。せ。ら。れ。る。雜。兵。們。が。索。ね。て。浦。邊。小。打。て。來。ぬ。躬。方。の。金。瘡。兒。八。名。之。深。瘡。を。も。窮
 所。の。あ。ら。戦。殺。へ。一。人。も。隨。便。金。瘡。兒。們。の。准。備。の。茶。と。飲。せ。瘡。を。果。し。勲。り。て。昨。宵。在
 下。ぐ。ら。ち。乘。來。ぬ。快。船。小。扶。兼。せ。看。病。奴。一。名。と。傳。て。穗。北。還。り。し。と。報。る。小。道。郎。點。頭。と。
 そ。い。く。計。の。い。ら。を。船。の。高。駿。の。浦。小。と。約。束。と。あ。ら。し。那。里。の。あ。ら。し。這。里。寄。せ。し。甚



麻をぞと向か有種然いひそ亦以ありてを。父間の船は比洋中漕浮ゆ。北へ走と假
 名川の。を投て急せし。道節の。訝と又その故と語の向ふ程。毛野の有種の答を。道
 道即より對ひ。大山主這船。約束の地方小歇け。故意此浦を。今又北へ返
 へ。合は天ての。思ひの。酒家へ。和殿も亦既小敵と。仇の種類の。竭た
 る。あ。倘我往方と知るの。あ。后知合家。告訴せ。大軍里で推寄せ。その折敵
 防戦。一城塚の。あ。二百。の。小勢と。只是穗北の。菅籠る。あ。半日
 多。柱の。縦戦。我。あ。我。の。覚。期。の。悔。多。足。取。る。あ。水垣の。老翁。落。點
 夫婦と。共。狩。場。の。雉。子。と。做。き。面。正。く。も。多。た。所。行。る。あ。の。故。小。我。出。没。を。後。々。ま。人。知
 せ。と。思。ふ。を。船。と。約。束。の。濱。邊。不。敵。系。其。苦。と。深。く。昔。昔。撰。て。遠。く。柴。浦。の。澳。子。あ。り。然
 又。羽。田。の。澳。小。漕。登。き。と。那。里。あ。り。日。と。銷。夜。深。て。穗。北。は。還。る。人。知。れ。走。後。安。う。の。を。

あの。議。不。儘。一。の。と。その。遠。謀。と。解。示。せ。道。節。并。不。餘。の。五。大。士。們。も。毛。野。が。遠。慮。と。感。嘆。と
 克。て。憂。緒。と。縮。ると。の。世。の。常。言。中。も。稱。い。さ。然。も。我。們。が。心。屬。多。た。所。心。術。智。玉。と
 卓。々。と。誠。の。感。心。々。々。と。齊。一。稱。賛。を。け。介。程。小。船。中。の。着。席。も。既。不。定。ま。り。れ。信。乃
 毛。野。の。二。天。士。の。選。不。初。面。會。の。口。誼。と。舒。る。是。宿。因。の。致。を。所。心。同。く。意。相。愜。へ。一。面。不。と。故
 舊。の。如。し。親。愛。死。骨。肉。小。異。る。登。時。道。節。の。莊。介。小。文。吾。現。八。大。角。們。と。共。侶。毛
 野。小。對。ひ。て。信。乃。が。五。十。子。の。城。を。火。攻。し。此。も。躬。方。を。損。り。瞬。息。間。小。城。を。抜
 いて。降。卒。と。誅。する。且。倉。廩。を。用。に。民。を。賑。し。仁。の。義。の。支。の。趣。及
 戰。栗。庫。の。白。壁。小。姓。名。を。留。め。論。示。の。文。の。愉快。多。道。節。が。追。書。さ。或。の。誦。し
 或。の。談。し。送。代。の。解。知。ま。れ。毛。野。の。只。管。感。激。し。約。莫。我。義。兄。弟。の。自。然。不。示。る。玉
 と。俱。ま。る。性。小。く。異。な。れ。孰。疎。疎。あ。る。も。就。中。大。塚。主。へ。金。中。の。紫。磨。石。玉。裡。の。夜
 光。と。亦。も。過。論。多。く。酒。家。の。決。し。及。び。と。答。言。と。信。乃。の。推。禁。め。の。不。と。然。り。あ



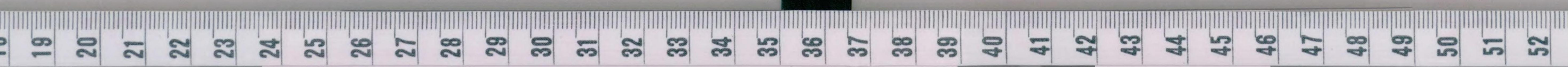
中。次國太が冤枉の縁繩を釋れんと欲するに、鮮目前の河鯉生も世に人として、
 多し。於那支成就者か。是の邊憾か。然るに不憚々相譚ふ毛野へ側り。ち
 守て大田主大川主の事も心憂ふ。昨日湯嶋の社頭より、越後へ使立られる妻有復六
 殿。殿大伴士、鯉二を相俱しく只官路を急ぐるべし。然るに鮮目前の逝去の片貝
 有復六も我実の姓名も、少知りたるのあはれ。這方の事は、決て障りあるべし。非
 除鮮目前の逝去の事、多し。鮮目前も亦女儀之那生前の願ひ多
 次國太の命を乞ふべく、聽ざるに、倒哀憐の心起りて、速に赦せられん。孰の方を
 成るべし。然るに疑ふところ、慰められ。小文吾井介、寔の理あり。と、應り共、
 是れを言の始りて、各々會話の限り、春の日の長きを、暮果て折と甲夜間
 るられ。かへも便り、つゝ、大家卒や退るを、潮候近は、順風、越帆揚、三隻船

楫儘て共侶北を投てを、まらせける。話分兩頭、介程、扇谷定正、高嶮の東盡
 大飼現、八犬村大角、一隊の精兵、趕通られて、危窮及び、折料、河鯉守如
 親子の為、極れて、辛く虎口を免れ。その隊の士卒、十五六名、守護せられて、忍岡を投
 走り、オホ一時許の程、那里の城へ入り、後安一と思ひ、御前大山道、即射られ、折着
 たる、盛を失ひ、幸ひ、中と、裏と、缺と、思ひ、一、虚瀬、御前、响の、故、その、大
 腫れ、猛可、痛楚、堪へ、て、そ、依、書院、倒臥、の、あ、づ、も、あ、づ、ま、當、城、の、諸、士
 驚、謀、で、段、西、師、と、聚、令、療、艱、術、と、盡、さ、る。更、軍、馬、と、調、出、て、攻、陥、さ、れ、居、五、十、子、の
 城、と、り、復、え、と、謀、さ、る。の、あ、づ、亦、只、這、里、と、勁、敵、不、責、ら、る。あ、づ、ん、鉄、と、四、門、と、鎖、一、銃
 窓、を、配、ら、て、小、心、の、外、さ、る。の、然、り、又、河、鯉、佐、太、郎、孝、嗣、高、嶮、の、板、橋、を、敵、も、情、を、毛、野
 道、節、が、至、極、の、意、見、を、听、く。あ、づ、立、別、れ、て、主、君、の、迹、を、草、芥、に、父、の、亡、骸、と、扛、棄、せ、る。轎、子、を
 先、立、七、馬、の、足、撥、を、早、も、て、忍、岡、小、末、に、権、且、路、傍、道、場、父、の、亡、骸、と、扛、入、る。



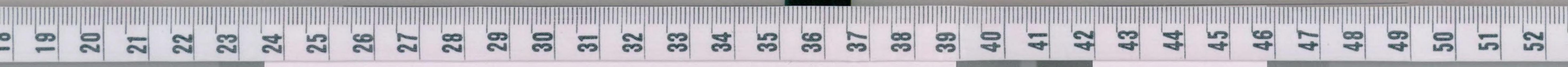
御馬前老い。屍を曝さんと思ひ。この空を。危窮と極ひ。追蒐。敵と桂
 與。高駿の東盡。細小川を前中。止す。士卒十餘名。俱必死を極め。敵左右
 る。較も。鬼ら。相睨て。在程。敵の士卒。ハヨ。勢ゆる。道。即。并。毛野。小。文。吾。在。介。
 學。も。取。合。ひ。る。考。ら。毛。野。の。道。節。君。祖。較。の。計。較。と。知。を。送。の。名。と。空。の。の。
 其。折。初。て。對。面。の。口。誼。具。は。夢。え。の。信。れ。那。風。陣。の。実。事。は。あ。る。昨。日。湯。嶋。の。密。談。道。節。
 が。偷。聞。て。君。と。犯。ま。り。の。罪。を。分。明。を。思。ひ。縁。連。を。誅。せ。ん。毛。野。攻。討。
 ら。る。上。様。の。死。行。を。只。計。策。密。を。仇。は。偷。聞。せ。る。守。如。疎。忽。の。罪。の。稟。
 去。解。を。の。ま。れ。臣。も。只。戰。役。の。覚。期。の。外。は。り。一。毛。野。と。同。志。の。勇。士。們。と。備。道。節。を。
 共。に。諫。め。守。如。が。忠。誠。と。相。憐。む。夫。々。道。節。も。亦。思。ひ。小。川。を。隔。て。對。陣。を。
 登。時。臣。忪。え。難。屢。敵。と。喚。り。て。戰。ひ。討。め。他。們。の。鋒。を。交。え。と。欲。せ。只。回。答。不。及。ひ。
 の。三。七。且。道。節。が。仁。田。山。晋。五。と。虜。せ。折。獲。ら。る。馬。と。放。り。還。一。於。勢。か。の。如。く。

それ。是非。及。び。立。別。れ。て。件。の。馬。を。ち。跨。り。君。の。死。後。と。暮。暮。ひ。ま。る。當。城。來。身。折。則
 親。の。亡。骸。と。路。の。傍。り。道。場。不。預。置。て。御。安。不。同。ひ。ま。り。御。病。臥。の。よ。り。を。御。症。
 可。を。察。ま。る。と。與。不。遠。侍。候。ひ。て。昨。宵。を。曉。ひ。ひ。敵。の。進。退。心。を。掛。れ。未。明。の。馬。を。ち。跨。り。
 五。十。子。へ。赴。く。程。先。高。駿。へ。馬。を。找。め。濱。邊。を。看。早。ひ。小。斬。梟。ら。る。躬。方。の。首。二。十。餘。
 級。の。中。に。我。君。の。死。盛。を。え。え。れ。最。惶。ゆ。會。卸。て。を。携。て。五。十。子。の。城。の。光。景。を。
 見。て。了。る。敵。の。頭。人。犬。塚。信。乃。ハ。一。日。在。城。を。倉。庫。を。ち。用。て。飽。を。民。に。施。す。の。
 義。を。自。啓。書。寫。着。て。姓。名。を。留。め。る。次。道。節。が。追。書。も。あ。る。文。の。箇。様。々。任。意。を。
 ゆ。ひ。と。一。字。も。忘。れ。ず。誦。ま。る。と。一。遍。誦。果。て。又。稟。を。上。任。れ。既。に。五。十。子。の。大。城。の。
 敵。一。人。も。あ。ら。ず。離。散。せ。躬。方。の。士。卒。の。か。の。來。る。の。二。三。百。名。四。門。を。成。り。ひ。死。を。如。勢。に。
 士卒。遣。は。れ。後。の。非。常。と。敬。言。め。ら。る。命。惜。も。當。城。不。免。れ。あ。る。あ。
 ろ。上。様。刃。伏。ひ。ハ。大。阪。毛。野。道。節。の。又。黨。ら。ん。と。思。召。す。口。一。筋。の。赤。心。を。れ。ども。



けの とうせう ありとあり。こころと。つとまもつとたり。あやまち。のちをすえあはせむ。あ
 毛野と道貞郎が做を処その志異るれ。上様の一毫もあし行心ひつる。のちをすえあはせむ。あ
 ら賢夫人の御貞実を悟る。せのよりもさく。義烈友て狂乱の類に似る。あ疑ひの。さく。あ
 と思ひまると存命する甲斐あはれ。今目見参入する。薄情も敵に搦られる。あ
 まへも隠して返り。なること。非除父が疎忽の罪。その身。刑戮さる。とも。その免る
 処。只上様の御婦徳。思ひ當り。せのひ。父が自投も。臣。道。聊稱ふ。も。あ。あ
 義を願ひまると。演。言。普。本。の。露。末。の。雷。も。委。ま。さ。る。落。る。涙。の。河。鯉。と。清。流。の
 音。わ。る。二。代。男。の。忠。孝。義。信。あ。る。氣。色。も。顔。に。後。方。も。置。死。る。袂。包。を。解。け。茶。く
 か。ま。盛。と。定。兵。備。の。措。せ。寂。然。と。且。羞。て。よ。も。を。又。孝。嗣。あ。ら。ち。對。ひ。て。這。盛。と。當。家。の。祖
 先。國。清。寺。住。山。道。昌。老。侯。の。法。號。の。等。持。院。殿。の。賜。り。る。希。代。の。名。譽。を
 けれ。命。け。て。前。返。と。喚。れ。る。然。る。昨。日。の。戦。ひ。我。身。の。寇。射。れ。折。不。子。の。聊。破。れ。れ。ど。も
 裏。鉄。さ。り。の。以。あ。る。る。只。面。を。家。傳。の。盛。と。冠。合。せ。れ。刺。濱。邊。の。櫓。の。措。れ。と。令。隱

せん 佐太郎人の及ぶ中心義の持て感さるる不餘あり。又縁連が好悪。這城内を甲し。も
 死す。の。あ。北。條。氏。と。和睦。の。議。我。行。初。知。れ。心。の。向。外。を。更。て。今。も。必。杜。絶。せ。然
 る。も。鮮。目。前。に。我。行。と。諫。難。て。人。々。借。て。縁。連。を。誅。せ。と。謀。る。我。妻。も。才。の。智。あ。り
 我。及。び。る。處。あり。一。那。信。聞。の。錯。誤。より。忽。地。刃。伏。ら。る。他。が。薄。命。の。さ。る。亦。我。一。大。不。幸
 況。守。如。が。精。忠。苦。節。の。死。臨。み。子。の。誨。て。我。窮。死。を。拯。ひ。る。功。も。亦。鮮。小。る。又。那。毛。野
 と。密。談。と。道。貞。郎。も。必。疎。忽。と。さ。る。我。生。運。の。惡。熟。を。取。買。妻。と。忠。臣。の。一。時。の。命
 殞。せ。疾。禍。鬼。の。出。示。あ。ん。か。と。今。ゆ。め。悔。さ。る。往。る。事。の。追。々。只。哀。れ。も。歎。け。孝。嗣。汝
 が。忠。孝。之。異。日。必。勸。告。あ。る。退。て。疲。勞。を。願。ひ。な。と。姑。且。暇。を。取。り。ま。さ。る。孝。嗣。の。感。涙。を。林。示
 難。々。言。美。と。遠。侍。へ。退。り。の。介。程。の。定。正。の。這。忍。固。の。城。守。ら。せ。る。一。個。の。老。當。根。角。谷
 中。二。麗。藤。と。喚。做。さ。る。と。有。司。の。毎。幾。名。執。務。可。あ。送。る。召。集。め。河。鯉。佐。大。郎。孝。嗣。の。忠
 告。の。趣。を。箇。様。々。と。言。示。と。傳。れ。今。五。子。の。城。内。に。留。り。敵。へ。一。只。躬。方。の。殘。兵。們。四。門。を

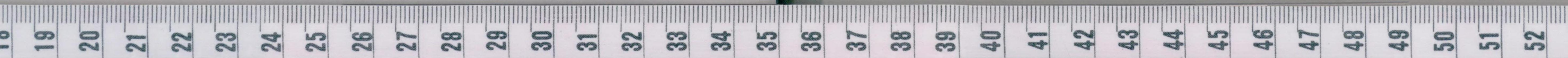


別 3
106
2

船曳。枉死の虚実を糾せしむる夏都て奇異あり。扇魔の火驗灼然たる疑心へ
 くるわられ専作只顧駭嘆とて。隨便媪内と船曳と枯首と斬せり。その時既の日の暮け
 せん。専作の首級を高懸の濱邊へとあり。然而斬梟れる躬方は首級と威令。却
 ちその頭髪を毎一隻の小石と結着て。情々地海に投沈め。更ふ又媪内と船曳の両箇の首
 級を梟首臺に雙梟け。他們が背に記される罪惡の趣と牌を寫着け。建置て大家五十
 子の城還るけり。次の朝も是とるもの或い訝り。或い冷笑て惡評よく。置品々。何人う又
 考うけん。建る牌一枚の短冊と糊添て。又落頰と寫し。其詞の。生か日本たの術
 あく醜即ち美男あるらん。首の入れ替とあり。例の人は癖多。夏は扇谷の黒吏們の兒
 戲の拙策も成るといふも。憐れ折媪内船曳が罪惡の世に頭れる。亦是造化の黙契終畢竟
 二兎梟首せられて。後の話説甚麼を。その次の巻の解分るを聽給か。

南總里見八犬傳第九輯卷之二終





国立国会図書館

タイトル『南総里見八犬伝 9輯98巻』 請求記号 本別3-2

ガラス使用